



英語

東京大教授 阿部 公彦

大学入試センター試験に代わり、新年度から新たに始まる「大学入学共通テスト」。改革の混迷について考える寄稿連載の二回目は、民間試験導入が見送られた英語がテーマ。東京大教授の阿部公彦さんに、より良い入試にするために必要なことを挙げてもらった。

二〇一九年、大学入試は「総論賛成なら各論歴史的な混乱に見舞われた。今回、注目を集めたのは大学入学共通テストでの英語民間試験の活用だったが、制度設計に無理があり、予定通りの実施が不可能なことが判明、運用開始直前の十一月になって急ぎよ、延期が発表されたのである。

こうした経緯から、今回の騒動はとかく運用面に注目が集まりがちだ。しかし、問題は他にもある。もちろん課題を突きつけられた政策推進者たちは「制度に問題はあるが理念は正

4技能「均等育成」は幻想

たとえば自分が読むものを、自分でも書けるという人がどれくらいいるだろう。新聞記事や小説を読めても、自分では書けないのがふつうだ。ニュースや講義も、聴いて理解はできても自分では話せない。母語でさえ四つの技能はでこぼこなのだ。ましてや外国語教育で「均等」を目標に掲げるとに意味があるのか。「均等」なる理念は実現不可能な幻想なのではないのか。



まずは「均等とは何か？」から議論すべきなのだ。ところが土台の危ういまま理念は独り歩きした。その弊害は大きい。いかにもお役所的に「配点の均等」といった形式主義が横行し、四技能という要件を満たすべく「話すテスト」が強引に

導入された。そのために試験対策が過熱する一方、採点などの実施体制には信頼性が欠け、試験全体の公正性に疑問符がついた。何より、本来英語の総合力を高めるには習得の順番や技能間の連携が大事なのに、四技能型という形式にとりわれ技能ごとの「ばらばら対策」が常態化すれば、「試験のための英語」しか身につかない。本末転倒だろう。

こうした迷走は結局、「均等は無理だから、ネイティブスピーカーの四技能バランスを目指そう」という話になる。今回、さまざま民間試験のスコアを比べるための参照基準となる予定だったCEFR（欧州共通参照枠）にもそうした考えが見え隠れする。だが、それでいいのか。日本における「英語の現実」はどうか。日常生活ではほと

んど英語に触れない。一年に一度でも英語を使う人がごく一部。この状況で、実現不可能な「母語話者モデル」をめざして意味があるのか。割ける時間も使用目的も上達可能性も限られるなら、おのおのが必要とする力を伸ばすことを目指すべきではないか。語学も多様性の時代だ。杓子定規な「均等理念」の押しつけは時代錯誤的だろう。中学校・高校ではまず芯となる体を鍛え、その先は自分で磨くという発想に転換すべきではないか。将来、英語とどう付き合つかは人それぞれだ。学校教育はそのための助走期間なのである。

四技能を連呼すればいい時代は終わった。「技能」や「実用」といった機械装置を連想させる価値観は、旧来の産業構造の名残だろう。そうした能力が早晚、機械に取って代わられるなら、人間に求められるのは柔軟な総合力ではないか。ばらばら型よりも、読む聞くといった能力の連携や融合に加えて、ジェスチャーや感情など別の要素も複雑にからむ状況への対応が必要なのである。テスト業者にとっては設問をパターン化した四技能分離型テストはスコア管理がしやすく便利だろうが、受験生にとって本当に大事なのは将来に備えた柔軟な言語運用能力の育成だということを忘れてはいけない。

軸足柔軟な運用力に

なら結婚 誰誰のため

め発言の産めよ増えよ という号令ももちろん個人にとつては余計なお世話だが、結婚し子ども

大波小波 を持ちたいのに、社会状況がそれを難しくしている人たちもいて、政治家は彼らのためにこそ知恵を絞り汗

をかくべきではないのか。恋愛や結婚に関して、常に当事者たちの最先端の意識をすくいとってきた山崎

ナオコーラの最新刊『リボン』

あのヤジの政治家へ

の男』（河出書房新社）は、いよいよ結婚後の生活に歩を進めた。非正規で働く主人公は、それでも結婚もしたいし子

どももほしい。結婚相談所で知り合った相手とめでたく結ばれ、妻の出産を機

に、自分が専業主夫となることを決める。しかし、家

事と子どもの幼稚園の送り迎えというルーティンに明

けては暮れる毎日に、主人公は葛藤を覚えざるをえない。このあたりが、現在の

子育て世代の意識のリアリティだろう。女が外で働き男が家を守る。頭では何もおかしくないと考へつつも、現実には

なんだか後ろめたい。しかしこの罪悪感の内側から出るものでなく、社会がしか

らしめるものだ。政治家の役割はこの罪悪感を解消す

ることにある。まずは本書を熟読することから始めよ。（兼業主夫）

2020.1.31

（あべ・まやひこ）

載「平 始ま 県立 30年 載」